京大・山中氏「新型コロナ治療薬、競争より結束を」

コロナと世界（8）

2020/4/19 17:42

京都大学 iPS 細胞研究所長の山中伸弥氏

――世界的な感染の広がりを予想しましたか。

「油断していた。重症急性呼吸器症候群（SARS）にせよ、中東呼吸器症候群（MERS）にせよ、流行範囲は限られていた。新型コロナウイルス感染症に関しては私自身、2 月中旬の段階では大丈夫だろうと思い、いつも通り京都マラソンにも出場していた」

「米ニューヨークの人たちも 2 月末まで他国の感染拡大を人ごとのように見ていたと聞くが、わずか数週間で感染者は急増した。日本だけ特別に感染が広がらない理由があったらうれしいが、楽観的すぎるだろう」

――感染を食い止めるために私権を制限する動きも広がっています。

「普段、私たちは気付かないうちに社会システムに守られ、研究や移動などの自由を謳歌している。今のような公衆衛生上の危機に直面した場合には、いっとき自由な行動を我慢してでも社会を守らないといけない」

「中国の武漢やイタリア、スペインのような状況では罰則を伴う強硬な措置もやむを得ない。そうならないために一人ひとりが自らの行動を変える必要があるが、メッセージが届かない人もいる」

「非常時に限定する厳密な条件付きなら、IT（情報技術）を使って人々の動きを追うのも効果的だ。すでにネットの利用歴などを通して私たちの行動はかなり企業に把握されている。技術の乱用は防がなければならないが、何でもかんでもダメでは前へ進めない」

――武漢の封鎖は解除されました。

「都市を封鎖し人を家に閉じ込め、ドローンで監視しても感染が減るのに2カ月半かかった。行動制限を緩めたらどうなるか心配だ。外出を厳しく制限した米国でも、死者が大きく減るまでに3カ月かかるという。ウイルスの性質を考えると、途中で対策をやめればピークは再び表れる」

「ほとんどの人は感染拡大の最初の山を越えたら安心してしまうようだが、その根拠はない。有効なワクチンや治療薬が開発されるか集団免疫ができるまで、対策を続けなければならない」

――治療薬の候補がいくつか出てきました。

「まず既存薬の中から使えそうなものを探すが、臨床試験を実施し本当に症状が改善するか統計学的に確認する必要がある。過度の期待はよくない。新型コロナに合わせた新薬も開発していかなければならない」

「我々もiPS細胞で貢献する。肺胞や心臓の細胞を大量に作りウイルスを感染させる実験を始めている。感染の仕方や薬の効き方の違いを調べられ、これまでにないデータが得られるだろう」

――国際研究協力の重要性も高まっています。

「生命科学の分野は非常に競争が激しく、特許戦争がありデータを隠す場合も多い。成果を出してから論文の発表までに1、2年かかることもある。しかし、お金もうけを目的とせず気持ちを一つにすることが大切だ。国の研究費も競争に勝つよりもデータを早く公開

し、他と協力した研究者を評価する仕組みがほしい。そうでなければパンデミック（世界的な大流行）に立ち向かえない」

（聞き手は編集委員　安藤淳）

◇

やまなか・しんや 1962年大阪府生まれ。大阪市立大で医学博士取得。2012年iPS細胞の作製でノーベル生理学・医学賞受賞。新型コロナの情報を「個人として」ネットで発信中。